

研 究 所 だ よ り

第2号



= 算数授業研の様子(穴内小) =

～目次～

研究協力校中間報告

穴内小学校	1
赤野小学校	4
井ノ口小学校	6
川北小学校	8
土居小学校	11
教育支援センター	15
【リレー寄稿】 安芸市教育研究所運営委員(長田 純彦)	18

【研究協力校 穴内小学校】

1. 本校の目指す児童像・教師像

児童像 「自分の考えをもち、自分の言葉で説明できる児童」

教師像 教育活動全般を通して

- ①根拠をもち内容を整理し、わかりやすく相手に伝えることができる授業づくりを目指す。
- ②特別活動を主体とした話し合い活動を全校に広げ、児童の自己効力感を高める。
- ③他校との交流活動を仕組むことで、積極的に他者とのかかわる力を育成する。
- ④地域交流を通して、体験したことや学んだことが積極的に伝えられるようにする。

2. 研究主題

確かな学びの定着を図る

～自ら学ぶ力を育む、少人数・複式学級における学習指導のあり方～

3. 組織的に取り組み授業改善 複式・算数

(1) 昨年度の成果

【児童の主体的・対話的な学びを意図することで、主体的な授業参加や学びの理解度が広がった。】

(要因)

- ①研究主任を中心とした、授業改善に向けた意識の変容・実践を組織的に行った。
- ②校内研修（授業参観や教材研究）を日常的・計画的に実施した。
- ③授業スタンダードや ICT 活用の共有を計画的に行った。
- ④教材研究や授業研究により、外部からの助言を頂いたことで、複式授業への考え方や教材の見方に幅が広がった。（授業づくり講座のメリット）
- ⑤ICT タイムの設定や電子黒板やタブレット端末を活用し、児童が互いに学び合う時間が増えた。
- ⑥指導と評価の一体化を児童の学習成果物（ノート）で見取ることができた。

(2) 本年度の研究

【研究主題に迫るための仮説】

昨年度取り組んできた組織的研究体制と実践内容を引き続き研究していくことで、継続した授業スタンダードによる児童の学びが保障できることや、児童が学びに見通しを持って自力解決やペア学びに繋げることができると想定している。また、学びのキーワードを用いることで、課題解決に向けた学びの見当を自らが考え、めあて・まとめ・振り返りの連動が生じることや個々の学びや集団での学びが広がると考える。そのことが、上記で記載した昨年度の成果をより進展させることになるであろうと捉え本年度研究実践を進める。

【具体的に期待する成果】

(児童)

- ①学習めあてを友だちと話し合って決めることができた。
- ②キーワードを使って、学習課題への検討（学びの見通し）を持つことができた。
- ③わからない時は、自ら友達に聞くことで、学習を止めない・自ら解決しようとする学習意欲が高まった。
- ④ペア学習を通して、友だちの考えを認めることができることや友だちの考えから自分の考えを広げることが授業の中でできている。
- ⑤タブレット端末を活用し、個別最適な学びをつくり出すことができた。
- ⑥めあて・まとめ・ふりかえりを連動させた学習ノートが積み上がってきた。
- ⑦家庭学習でタブレット端末を積極的に活用した自主学習が増えた。
- ⑧学ぶ意欲の向上や各学調において全国平均＋5を目指すことができた。

(教師)

- ①組織的な授業改善を図ることで、個々の意識・意欲の変容に繋がった。
- ②授業の行動統一を図ったことで、視点を決めて授業を語り合う機会が増えた。
- ③児童が自分の考えをもち、根拠をもとに友だちと伝え合う学習環境を整えることができた。
- ④意図的にタブレット端末の活用拡大を図った。
- ⑤直接、間接指導を通して、児童に寄り添った支援を継続して実施できた。
- ⑥学びを児童や保護者と共有し、児童の安心感や意欲を高めることができた。
- ⑦各学調の課題を意識した授業展開や加力学習に努めたことで、学習意欲や理解度に繋げることができた。

【実践】

- ①昨年度の実践をより組織的に取り組むための考え方・方向性を共有する。
- ②校内研修の年間計画づくりや授業相互確認を行う。
- ③先進校視察（高知市立浦戸小学校）
- ④校内研修を計画的に実施する。
- ⑤ICT タイムを週1回設定する。
- ⑥学期ごと単元末・学期末テスト、12月県版学調及び市版学力調査で学力向上の検証を行う。
- ⑦学力検証後、3学期課題分析を行い、各学年で最終解決策を実践する。
- ⑧基礎学力、応用力の向上を図る。（ドリル・プリント・タブレット端末等）
- ⑨個別指導により個々の学習理解度を高める。
- ⑩家庭学習（自主学習）の充実を図る。市立安芸中学校テスト週間に合わせた家庭学習パワーアップ週間を設定する。ワークシートやノーメディアの協力要請を家庭に行う。
- ⑪タブレット端末を活用した家庭学習の継続と充実を図る。

(3) 1学期の取り組み

【3・4年授業研の様子】

(児童が自分たちで学習のめあてを決めたり、気づきを話し合っている場面)



(電子黒板を活用し、考えを共有する場面)



(タブレットを活用した学習の様子)



【学習評価】

- ①児童の電子黒板やタブレット端末の活用が迅速に行えるようになり、考えを共有する時間が多かった。
- ②教科書・ノート・電子黒板・タブレットを必要に応じて学習用具とした学びが進んできた。
- ③児童の発言が増えてきたことで、学びの意欲が高まったことを実感している。

【研究協力校 赤野小学校】

1. 研究主題

「主体的・対話的で深い学びを生み出す複式授業」
～数学的活動を通して自分の考えを出し合える授業の創造～

2. 研究主題設定の理由

社会の変化に伴い、学習指導要領において学校教育に求められているものが、“児童が主体的に課題に対して向き合い・関わり合い、一人一人が自らの可能性を最大限発揮し、よりよい社会と幸福な人生を自ら作り出していく資質・能力を育む学校教育”と位置付けられている。必要な資質・能力とは、教科共通で育成する資質・能力と各教科における見方・考え方をもとに育成するものである。本校においても、児童に身に付けさせたい力を、学習指導要領をもとに、具体化していく実践を進めている。

ここ数年の本校児童の課題は、「自分の考えをもって授業に参加し、表現することができない」である。

特に、算数科の各種学力調査からは、思考力・判断力・表現力の観点に課題が見られる。また、領域別では「数と計算」「図形」の設問についてやや正答率が低くなっている。要因としては、基礎的事項の定着が不十分であったり、問題文を正確に読み取る力や問題場面や数量をイメージする力が十分でなかったりすることが考えられる。学年が上がるにつれて、算数の用語や概念を理解するための時間や場を十分設定できていないこともあり、上記の課題につながっていると思われる。

また、授業の中で、相手を意識した“聞く・話す”活動が十分に行われていないことが課題として挙げられる。要因としては、課題について考えたいという主体的に思考するための授業づくり（単元構想など）が十分できていないことや、とも学び場面での学習リーダーやフォロワーの技能を育てるための場の設定などが十分できていないことなどが考えられる。

そこで、算数科において育てたい児童の姿を“自分が選んだ方法で課題解決をし、思考過程を表現し、互いの考えを深め合うことができる児童”として、児童の課題を解決するための方策を

（１）児童が主体的に思考するための数学的活動の設定

（２）自他の考えを深める手だて とした。

以上のことを踏まえ、課題を解決するために考えたいという主体的に思考する数学的な活動を設定し、自他の考えを深める方法を用いた授業を研究することで、主体的・対話的で深い学びを生み出す複式授業に近づくことができると考え、研究主題を設定した。

3. 主な取り組み

（１）授業力の向上

①授業研究の実施

- ・ひとり学び、とも学びの充実を図る。
- ・複式授業スタンダードの構築、確認、改善を図る。

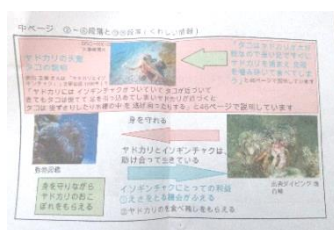


・ ICT の効果的活用 ＊高知大学教職大学院との連携

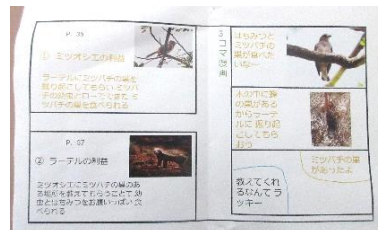
【第4学年国語科：ヤドカリとイソギンチャク 全13時間】



下山小学校との遠隔授業



端末を用いてのリーフレット作成



・算数・数学科スーパーバイザー派遣事業（年間2回 公開授業）

【第3・4学年算数科：「長いものの長さのはかり方と表し方」「角の大きさ」

講師：鳥取大学名誉教授：矢部 敏明 氏



【講師より】

- 解の検討は大切だが、そこに根拠を持って検討できるように育てるとよい。
- 机間指導での声かけは大切。よくできている考えは、全体へアナウンスを広げようにする。
- 45分間の中で、児童が友達を必要とする場面はどこなのかを考えたい。「一人学び」という名称であっても、友達を頼る必要がある場面であれば、頼ることも大切。

【今後、全校で取り組むこと】

- とも学びでは、解の確認で終わらせるのではなく、書く、聞く、話す等、表現する活動を通して、確かさをみんなで確かめさせる。そのうえで、共通点や相違点、規則性に気づかせるようにしていく。
- 待つ児童から、自分から動ける児童にしていく。
 答えを書く→理由を書く→友達と確かめる→とも学びを始める
 これらの活動が自然とできるように、次なる行動を促す支援を積極的に進めていく。

＊児童を促し褒め、学びの自立へ

・特別活動の授業研（2学期 講師招聘研修）

②各種学力調査の分析を活用し、授業力の向上、授業改善のPDCAサイクルの構築を図る。

（2）学力の向上

- ①読書の推進
- ②チャレンジタイムの内容の充実
- ③家庭学習の充実
- ④各種学力調査の分析を活かした授業改善

【研究協力校 井ノ口小学校】

研究主題「豊かな表現力の育成と主体的な学びの実現」 「明日も来たい井ノ口小学校」を合言葉に

1. 昨年度の実践を受けて

本校は、昨年度「豊かな表現力の育成と主体的な学びの実現」を研究主題に、「楽しい学級・学校づくり」「ユニバーサルデザインに基づく授業づくり」の二つを柱に取組を行った。

昨年度の各種アンケートの結果によると、「学校が楽しい」が84%で目標の90%を下回っていた。また、「授業中、自分の考えを周りの人に伝えたり発表したりしている」も73%で目標の80%を下回っていた。「授業中進んで話し合っている」は80%という結果であった。

今年度も、「豊かな表現力の育成と主体的な学びの実現」を研究主題として、「基礎基本の定着」、「特別支援教育及び人権教育を基盤としたいいじめや不登校を生じさせない温かい学級・学校づくり」、「道徳教育及び特別活動の充実と効果的な関連を通した、楽しい学級・学校づくり」を重点に置いて、引き続き「楽しい学級・学校づくり」「ユニバーサルデザインに基づく授業づくり」の二つの柱で取組を進めていく。児童も教職員も「明日も来たい井ノ口小学校」を合言葉にして実践研究を進めていくこととした。

2. 「明日も来たい井ノ口小学校」に向けての1学期の取組

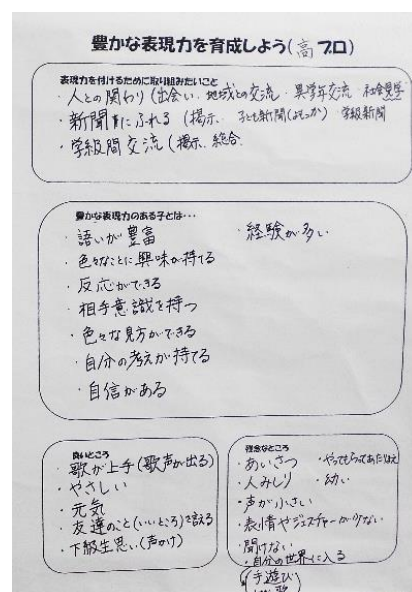
(1) 豊かな表現力の育成と主体的な学びの実現

①豊かな表現力についての整理・共通理解

- ・児童の実態（良いところ・残念なところ）
- ・豊かな表現力のある子とは？
- ・表現力を付けるために取り組みたいこと

②3年算数授業研

- ・教材研究会
- ・授業研究会



③東部教育事務所支援訪問

- ・「外国語活動・外国語の授業づくり」
外国語活動・外国語の授業のスタンダードを学ぶ
- ・「外国語活動の指導案検討」
外国語活動の指導案検討を通して授業改善のポイントを学ぶ
- ・「総合的な学習の時間の活動について」
児童が主体的・探求的に活動できるような活動のすすめ方のポイントを学ぶ



(2) 基礎基本の定着

- ①授業スタンダードの確認
- ②「家庭学習のすすめ方」配布
- ③自主学習ノート展
 - ・2～6年生の良いノートを校内に掲示
- ④6年全国学力・学習状況調査
 - ・自校採点分析後取組を確認
- ⑤4・5年安芸市版学力調査
- ⑥ICT教育の推進

- ・chromebook 年間指導計画の確認
- ・ICTスキルアップ研修で授業での活用について研修
- ・児童が考えをまとめ、ジャムボードを使って、発表・表現する場面を設定
- ・スプレッドシートでの振り返り
- ・静止画や動画を撮影したものを授業で活用(体育・理科)
- ・毎日の持ち帰り(宿題、次の日の予定等をタブレットで確認)

重点目標
 ①コンピュータやインターネット等を情報収集・選択及び創造・発信の学習ツールとして活用することができるようにする。
 ②情報モラルの認識を高め、主体的に情報社会に参画する態度を育む。
 ③コンピュータやインターネット、オンラインゲーム等の利用に人間関係のトラブルや心身の健康への影響について具体的な事例を基に学習し、それらを利用する危険性を認識する。

テーマ	Chromebookを知る	Chromebookを活用する	Chromebookを活用できる			
学 年	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
ドライブ	 データをフォルダに保存できる。	必要なファイルを指定してダウンロードできる。	ネットの画像等をフォルダに保存できる。	ネットの画像等をフォルダに保存できる。	自分でフォルダを作り、必要な画像を保存できる。	その他のデバイスからドライブに接続できる。
Classroom	 先生からの資料を見ることができる。	課題を確認することができる。	Classroom 内でコメントできる。	ストーリーにメッセージを置くことができる。	自分が作成したデータを共有することができる。	教師が友達とメッセージのやり取りをする。
スライド	 スライドの順番を変えることができる。	スライドの順番を変えることができる。	スライドの順番を変えることができる。	スライドの順番を変えることができる。	スライドの順番を変えることができる。	スライドの順番を変えることができる。
フォーム	 教科書の質問に答えることができる。	教科書の質問に答えることができる。	教科書の質問に答えることができる。	教科書の質問に答えることができる。	教科書の質問に答えることができる。	教科書の質問に答えることができる。
ドキュメント	 教科書の質問に答えることができる。	教科書の質問に答えることができる。	教科書の質問に答えることができる。	教科書の質問に答えることができる。	教科書の質問に答えることができる。	教科書の質問に答えることができる。
ジャムボード	 授業で考えたことを書くことができる。	授業で考えたことを書くことができる。	授業で考えたことを書くことができる。	授業で考えたことを書くことができる。	授業で考えたことを書くことができる。	授業で考えたことを書くことができる。
スプレッドシート	 授業で考えたことを書くことができる。	授業で考えたことを書くことができる。	授業で考えたことを書くことができる。	授業で考えたことを書くことができる。	授業で考えたことを書くことができる。	授業で考えたことを書くことができる。
ミート	 教科書で調べたことを書くことができる。	教科書で調べたことを書くことができる。	教科書で調べたことを書くことができる。	教科書で調べたことを書くことができる。	教科書で調べたことを書くことができる。	教科書で調べたことを書くことができる。
写真	 授業で考えたことを書くことができる。	授業で考えたことを書くことができる。	授業で考えたことを書くことができる。	授業で考えたことを書くことができる。	授業で考えたことを書くことができる。	授業で考えたことを書くことができる。
タイピング	 授業で考えたことを書くことができる。	授業で考えたことを書くことができる。	授業で考えたことを書くことができる。	授業で考えたことを書くことができる。	授業で考えたことを書くことができる。	授業で考えたことを書くことができる。

(3) 温かい学級・学校づくり

- ①組織職員会での児童理解
- ②児童理解研修(講師:是永かな子先生)
- ③Q-U アンケートⅠ回目→分析交流
- ④学校生活アンケートⅠ回目→聞き取り、職員会で共有
- ⑤校内支援会
- ⑥支援ミーティング

(4) 楽しい学級・学校づくり

- ①縦割り班活動
 - ・前期縦割り班編成
 - ・春の遠足(各委員会計画のゲーム)
 - ・スポーツテスト
- ②学級活動(3)「明日も来たい井ノ口小学校」にするには
 - ・運営委員会から児童へ呼びかけ→学級会で話し合い→代表委員会で決定
 - ・担当者が計画実施(全校ケイドロ、全校かくれんぼ)
- ③道徳の授業改善等
 - ・研修内容の共有
 - ・道徳アンケートの分析・考察
 - ・道徳だより発行



(5) その他

- ①地域のミニデイ(地区社協主催)に参加して
 - 地域の高齢者の方と交流
 - 5月「鯉のぼり運動会」・・・4年生
 - 7月「七夕まつり」・・・5年生
- ②異学年での発表等の交流



【研究協力校 川北小学校】

1. 研究テーマ

互いに認め合い、自分の考えを伝え、協働的に学ぶ児童の育成
～主体的に考え、根拠をもとに説明（表現）する力を身に付ける授業を通して～

2. 研究主題設定の理由

昨年度より、「川北の授業スタンダード」をベースに授業改善を進めてきた。各種学力調査の結果をみると、どの学年もD層(25%以下の正答率)の割合が高く、全国平均以下の学年も多い。また、学習指導要領に基づいた授業研究を推進し、各種学力調査の結果分析や課題改善への取組を、学年ごとに決め共通実践してきたが、基礎学力が定着していないこと、自分の考えや根拠をもとに説明できないことなどの課題がある。

以上のことから、本年度は「令和の授業を創る」推進プロジェクト授業づくり講座（算数）の県指定を受け、上記の課題改善と児童の資質・能力の育成に向けて、ICTを活用し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業研究を推進していく。算数科の学力向上と指導力向上だけでなく、発達段階に応じた協働的な学びや対話の在り方についても追究していきたい。研究主題のもと、「互いを認め合い、自分の考えを伝え、協働的に学ぶ児童の育成」を目指し、RPDCAサイクルを回しながら取り組んでいく。

3. 研究内容

(1) 授業スタンダードの確立

個別最適・協働的な学びを充実させるために「授業づくりのスタンダード」をベースに、基本的な学び方や学習活動を全学年共通して行う。どの教科においても、共通の学び方や学習過程を取り入れた授業を行う。（共通の授業アイテムを使用）ただし、基本的な流れとするものであり、毎時間をこの形式で行うことにはならない。児童の実態に合わせた授業づくりに努めるものとする。

(2) 研究推進の概要

①授業づくり講座（算数）教材研究会・授業研究会（各1回）

講師：笠井 健一 先生【文部科学省初等中等教育局教育課程教科教科調査官】

上村 詩織 指導主事【高知県教育委員会事務局 東部教育事務所】

②全校授業研 年間5回（公開授業・研究協議） 講師：上村 詩織 指導主事

③基礎学力定着・向上の取組

ア：ステップアップタイム（13:30-13:45 水曜日はなし）

音読3分間、計算プリント5分間、算数・国語プリント集5分間

イ：ぐんぐん教室（毎金曜日1・2年 14:45-15:15、3～6年15:40-16:10）

児童の学習支援を行い、算数と国語の基礎学力定着を目指す。

ウ：MIM（火曜日8:25-8:30、金曜日8:25-8:30）

文字を読む力をつける。特殊音節の読みに対する躓きを見取る。

エ：漢字テスト（月・火・木・金曜日 火と金はMIMの児童は除く 8:25-8:30）

既習した漢字の確実な定着、新出漢字の習熟

オ：家庭学習への働きかけ

「家庭学習の手引き」をもとに課題を設定し、授業と家庭学習が繋がるよう主体的に学ぶ児童を育成するため、自主学習の取組を行う。

カ：自主学習ノートコンテスト

お互いの自主学習ノートを見合う機会を設け、意欲化を図る。

キ：各種学力調査の結果分析と共通実践

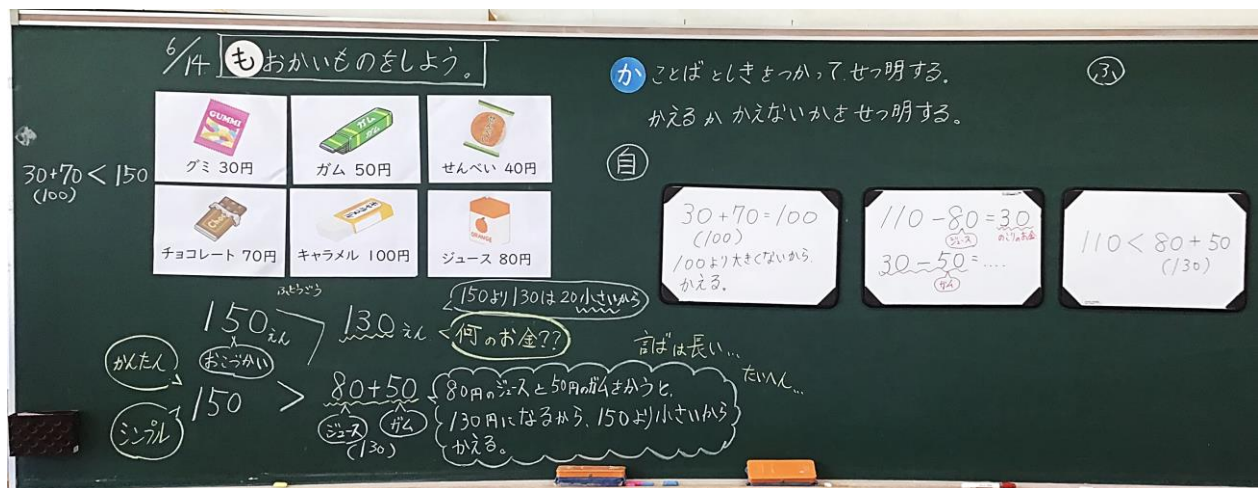
各種調査実施後、自校採点・分析を行い、全員で各教科の重点的に指導すべき事項と全校で統一して取り組むことを確認し、計画的に実践する。

ケ：その他

板書交流、指導力向上週間の設定 など

(3) 1学期の授業研究から

① 2年算数全校研「1000より大きい数を調べよう」授業者：長谷 和樹 教諭



【講師（上村指導主事）より】

<全体を通して>

○児童が興味を持てる場面設定（お菓子の買い物）がよかった。また、既習事項を見せながら比較している場面がよかった。

○線を引く、説明の言葉を書く、価値付け継続させていくことが大切。児童とのやりとりで、補助発問をしていて、見方・考え方を働かせる場面が見られた。「比較」「価値づけ」はとても大事。

△児童の困り感をどう扱うか。高学年ならチャット等を使い友達と考え合う方法もある。

<本時の目的は？>

・今日の評価は「式の良さ」を実感するところではないか。不等号を使うと、言葉で説明をたくさん書く必要がなく、簡単にシンプルに表すことができるのだと振り返りに書かせたかった。（例）学指P108, L1～2「手際の良い比べ方や数え方を考えていく」

・式を学ぶ価値 ①簡潔・明瞭・的確に表現することができる

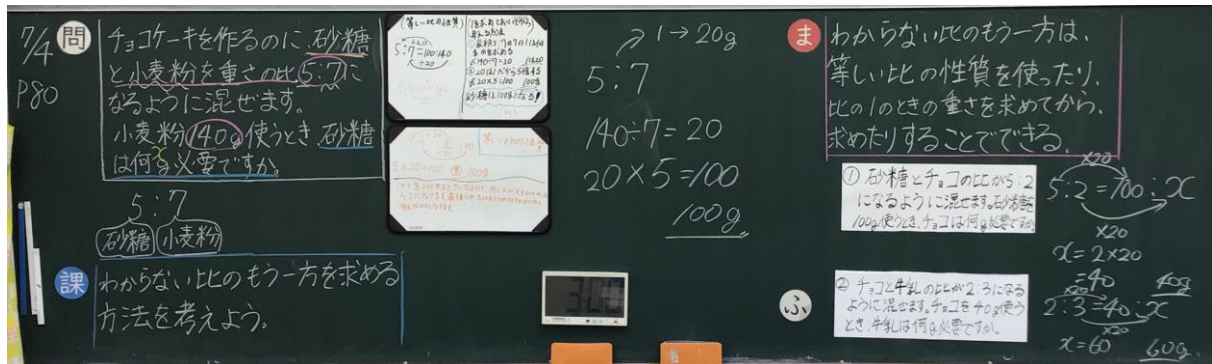
②思考のプロセスを表現できる → 手際よく比べることができる

・子ども達は不等号を使って表したものを「式」と思っているのか？ → 今回の式の意味は演算決定ではなく「関係性」を表すもの。前時で等号の意味理解はできているのか？良さの実感をしていたのか？良さの実感・便利さ・意味理解ができてこそ、使おうとする。

<本時の流れは？>

- ・手際のない比べ方ができるようになるために、教科らしい文脈を描けていたのか。
- ・本時の活動をしたことで何がいえるのか？ → 「一般化」をしないといけない
- ・数学的活動をしているように見えたが、本質のところまでたどり着くことはできていない。
- ・振り返りは良さの実感をさせること、または、次時の活動につなげること（明日はこんなことしてみたいな）

②6年算数全校研「割合の表し方を調べよう」授業者：木村 直樹 教諭



【講師（上村指導主事）より】

<グループ協議について>

○先生の言葉から「学指のここにこんなことが書いてあるから」「数学的活動」「Aのところが」という言葉が聞かれた。初任者も子どもの姿で自分の意見を語ることができていた。

<導入について>

○時間はかかりすぎたが、「比例」「比が使える」という言葉が出ていた。

△「1人分」「2人分」という言葉を使ってしまった「2倍」「3倍」という言葉を使っていたら1あたり量を求める思考にはならなかったかも。

<課題解決について>

△比の値が出なかった。→ 他者参照の良さが分かっていない。真似をして書いていたが、意味は分かっていなかった。比の値の意味が分かっていない。確実な定着を。

△グループ共有の目的は何か？→多様な考えの共有の時間が、賢い子の考えを写す行動になっている。

△全体共有は何をすべきか？→児童は共有に必然性を感じているのか？今後することは、グループを意図的につくること。

△課題はよかったのか？

→子どもは「比を使って」と発言していたから、その言葉を入れたら良かった。

☆比の値を学習するのはなぜか？→学指P304参照。比の値を用いると比の相等を確かめることができる。

<その他>

- ・教科書の流れでいいのか？
- ・既習事項と共通する大切な数学的な見方は何かを確認する。
- ・既習の学びから新しい概念を構成する。→ 日常の事象からD2「解決過程を振り返るなどして概念を形成したり、体系化したりすること」に進むこともできる。今回であれば、約分や通分していた時と同じ考え方だな（学びの自覚化）

【研究協力校 土居小学校】

1. 研究主題

自分から考え、生き生きと表現する児童の育成
～対話によって学びを深める授業の工夫～

2. 研究主題設定の理由

本校は、昨年度まで研究主題を「自分から考え、生き生きと表現する児童の育成～友達とのかかわりを通して～」と掲げ、令和2年度まで取り組んだ「英語教育拠点校事業」の成果を、「算数科」「特別活動」を中心とした実践研究に生かし広げてきた。

そのことにより、児童は1単位時間の学び方を身に付け、少しずつ「めあて」や「まとめ」を自分たちで考えようとする姿も見られるようになってきた。また、友達とかかわり合うことで、自分の考えを表現してみようとする児童や新たな学びを発見したりする喜びを実感している児童の姿も見られるようになった。

しかしながら、まだ意欲的に授業を進めようとする児童や新たな課題を導き出し挑戦しようとする児童は固定されている。また、各種学力調査やアンケート調査の結果・分析等からも、活用する力、粘り強く取り組む力への課題が見られ、子ども同士の学び合いや自分事として問題解決する姿が見られるような教師の手立てが必要である。とりわけ、自分の考えを表現することに対して自信がなかったり、受け身な姿が見られたりしている。

令和3年答申では、『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～が打ち出された。背景には、近年における子供の多様化やGIGAスクール構想が進む中で、一人一台端末の整備やICTの活用により、オンライン学習などが推進され、「学びの保障」と「学びの充実」の両面から成果が求められているからである。また、令和4年答申(1)「新たな教師の学びの姿の実現」においても、令和の日本型学校教育を担うために、教師の学びの姿も、子どもたちの学びと相似形であるということを示されている。

そこで、研究主題を「自分から考え、生き生きと表現する児童の育成 ～対話によって学びを深める授業の工夫～」とし、「算数科」の研究授業を柱とした取組を推進する。ICT機器を効果的に活用し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図ることを通して、すべての児童が主体的に課題を解決しようと思ったり、対話によって自らの考えを深めたりすることができる「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行う。併せて、指導と評価の工夫・改善のサイクルを回して、児童の資質・能力を育成する。

また、教師の学びの姿も、子どもたちの学びと相似形であることから、校務DXを推進していくとともに、ICT機器を活用して、研究主題を明らかにするための手立てを、1年間を通じて探究的に学び合う。さらに、算数科において、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行い、対話によって学びを深める授業を行う。これらにより、目指す児童像である「自分から考え、生き生きと表現する児童を育成すること」ができるであろう。

3. 研究主題に関わる取組

(1) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善…

児童が見方・考え方を働かせ、問題解決する力の育成

「算数科」を中心とした他の教科・領域においても、児童一人一人が主体的に課題を解決しようと思ったり、相手意識をもって自分の考えを表現したりする等、他者とかかわり、つながりながら学びを深めることができる「わかる・楽しい」授業の実現を目指す。

(2) 児童の自主的・実践的な活動となる特別活動の推進…自己指導能力の育成

昨年度、「夢・志を育む学級運営のための実践研究事業」の拠点校として取り組んできた特別活動の実践研究を、さらに進化・統合し、児童の自主的・実践的な態度と、自己指導能力の育成を目指す。

(3) 個に応じた指導・支援力の向上を目指した特別支援教育の充実・開発的生徒指導の充実…

一人一人の居場所となる学級・学校づくりのために

一人一人の違いを認め合いながら、ともに成長しようとする集団づくりに取り組む。また、外部講師を招聘した校内研修会を開催することにより、個に応じた効果的な指導・支援の実現を目指す。さらに配慮の必要な児童の早期発見・早期対応と学校全体での支援につなげる体制の構築を目指す。

4. 研究が充実するための教師のテーマ

教師は子どもの“学びのロールモデル”～教師の個別最適で協働的な校内研修の実現へ～

児童へのキーワード

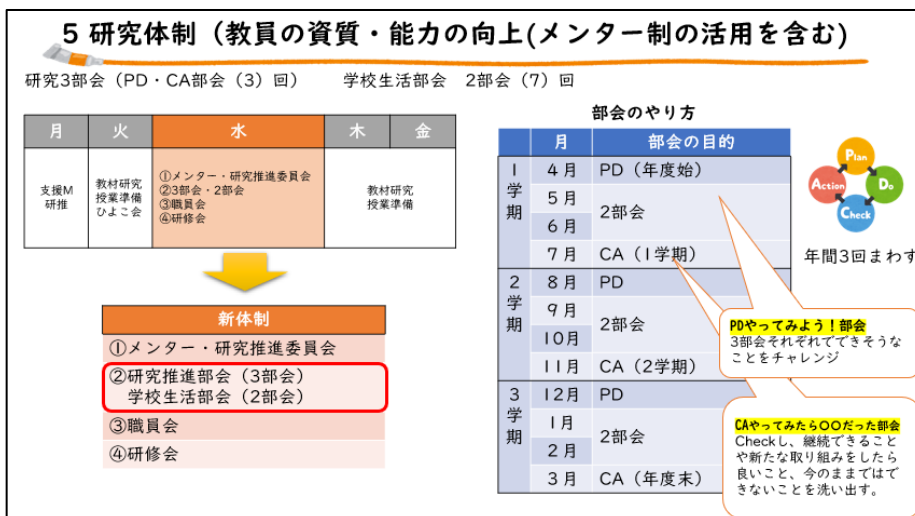
- ① つながる（学びや友達と）
- ② 日々の学び合い
- ③ 振り返りの充実（指導と評価）
- ④ かかわり合い

教職員のキーワード

- ① 自分ごとの研修
- ② 日々の学び合い
- ③ 振り返りの充実（PDCA）
- ④ アウトプット（研修の学び等）

5. 研究推進における校内体制

(1) 三部会・二部会の組織体制



・学期ごとに、PDCA サイクルを回すように学校経営計画に基づく手立てを推進していく。

・研究三部会と学校生活二部会に分かれ、研究と実務を分けて取組を行う。

(2) 1年間研究主題を明らかにしていくための研修体制・研修イメージ



- ・対話によって学びを深める授業の工夫を明らかにするために、各研修会でテーマを設定し、自身の実践や考えを協働的に職員間で学び合い、深める。
- ・実践の記録や振り返りは、クラスルームを活用する。
- ・いつでも、どこでも、だれとでも学ぶことができるようにタブレット端末を活用して、授業改善シートへ記入していく。

(3) メンター会：年間12回 水曜日 15:00～15:30

- ・OJTの充実に向けて、各教員の研修やこれまでの学び等をアウトプットする機会を保障する。また、各教員の実践研究と学校全体の研究が両輪となり授業改善へ繋がられるように、授業改善の視点を明確にしていく。
- ・教員個別の授業の悩みや目指したい授業をブロック会で共有し、授業改善の視点の3つ目として設定する。
- ・ブロック会や研修会での学びを共有し、振り返り（リフレクション）を確実に行うことができるように、Google classroomのスライド機能を活用する。

(4) ひよこ会：年間10回 金曜日 15:45～16:15

- ・若年教員の資質・能力向上のために行う。
- ・学びを共有し、振り返り（リフレクション）を確実に行うことができるように、Google classroomのスライド機能を活用する。



6. 研究・研修の計画

(1) 全校研：算数 計6回（1～6年生）

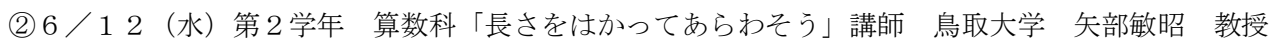
（講師 鳥取大学 矢部敏昭 教授2回訪問）

(2) 校内研修：計14回

- ・1年間を通して、研究主題・副題を明らかにするための研修を行う。
- ・全校研・是永教授の研修を含む

(1) 全校研

5月15日（水）公開授業 6年生 算数 テーマ：対話



教育支援センター

◇◇第2回教育支援センター運営委員会◇◇

7月30日（火）10時より、第2回教育支援センター運営委員会を安芸市役所で開催しました。前半は、『ふれあい教室』の活動報告や各校からの実態報告を行いました。

後半は、スクールカウンセラーの大城由美先生を講師としてお招きし、『不登校の早期発見・早期対応』という演題で、ご講話をいただきました。

『不登校の早期発見・早期対応』の流れ

早期発見～子どものSOSを見逃さない～

・複数の目で・多角的な視点で・保護者からの情報

- 1) 身体化（腹痛、頭痛、吐き気、風邪が長引く、朝起きられない等）
- 2) 行動化（欠席、遅刻・早退、トラブルが多い、ルールが守れない、ぼんやりしている等）
- 3) 言語化（日常会話や面談で悩みとして話せる、日記やアンケートで悩みとして書ける）

アセスメント～子どものSOSから背景を考える～

早い段階で・複数の目で・保護者との連携・SCやSSWとの連携 決めつけはしない

- 1) 学校生活にストレスを感じている
- ①友人関係（いじめ、友人とのトラブル、一人で過ごしている、からかいや嫌がらせ）
- ②教師との関係（教師から避ける、保護者からの情報）
- ③学習面の課題（宿題ができない、授業についていけない）

※教員と本人・保護者との意識のずれがある

- 2) 心身症（発症の経過に、ストレス等が大きく影響する身体疾患）
 - ①過敏性腸症候群（頻繁な腹痛、トイレによく行くなど）
 - ②起立性調節障害（朝起きられない、立ちくらみやめまい、午前中調子が悪い）
- ※起立性調節障害の2/3が不登校経験、不登校の1/2が起立性調節障害というデータもある。
- 3) 発達障害（二次障害としての不登校）
 - ①自閉症スペクトラム障害（ASD）　こだわりが強い、感覚過敏（音、光、味など）
 - ②注意欠陥多動性障害（ADHD）　おしゃべりが多い、じっと座ってられない
 - ③学習障害（LD）　読み書き計算等に特定の不得意さがある
 - 4) 精神疾患（SC、医療機関との連携）
 - ①不安障害（強い不安や恐怖で日常生活に支障が出る）
 - ②うつ病（眠れない、寝過ぎる、食欲がない、食べ過ぎる、イライラしている）
 - 5) その他不登校に結びつきやすい状況（SC、SSW、福祉、医療との連携）
 - ①分離不安（低学年に多い）
 - ②無気力（できない体験の積み重ねの結果、怠学傾向）
 - ③家庭環境（不適切な家庭環境、虐待、ヤングケアラー）

早期対応～具体的な配慮と初期支援～

- 1) 学校生活にストレスを感じている
 - ①教師と子どもが安心して話し合える関係が必要
 - ②原因がはっきりしていて取り除ける場合は対応
 - ③原因が取り除けない、はっきりしない場合（感じ方、考え方のずれに注意、配慮）
 - ・教師が安心できる存在になることが必要
 - ・登校時間の調整、席の工夫などできる範囲で環境調整
 - ・SC 等に話を聴いてもらうのも有効
 - ・ICT の活用
 - ・教育支援センターの活用
- 2) 心身症
 - ①医療との連携
 - ②生活習慣の見直し
 - ③いつでもトイレに行けるような配慮（過敏性腸症候群）
 - ④登校時間の配慮（起立性調節障害）
- 3) 発達障害
 - ①個別の具体的な支援（視覚支援, SST, 安心で安定した環境づくり）
 - ②クールダウンできる場所の確保
 - ③自己肯定感の低下を防ぐ
 - ④選択肢と結果を示し、自己選択を促す
- 4) 精神疾患
 - ①医療との連携
 - ②安心できる環境づくり

～参加者からの感想～

- 不登校への対応で重要なのは早期対応だと改めて感じました。子どもが出す SOS を早期に発見し丁寧な対応をするために、まずは子どもの状態を把握しておくことが大事です。日常の様子を知っておくと早い段階で気づくことができるので、日頃から観察するようにしていきたいです。次に複数でアセスメントをすることを心がけていきたいです。自分だけで考えたりせず、SC や SSW などと連携をとって様々な視点で子どもを見つめることで、見えてくることもあると思います。あせって行動せずに複数体制で専門家の力も借りながら丁寧に対応することを今後も続けていきたいです。
- 大城先生の講話を聞いて、起きている事象にだけ目を向けるのではなく、その背景を捉えることの重要性について改めて確認することができました。具体的な症状についても知ることができ、見立てのポイントを学ぶことができました。今日学んだことを日々の子どもの関わりの中で活かし“この子の SOS は何だろう”の視点を持ち、SOS を見過ごすことがないよう努めたいと思います。
- 子どもの SOS から背景を考えるために、子どもの症状、状況から心身症、精神面、発達障害等の傾向についても考えることが大切であることや、具体的な早期対応について子ども自身と環境両面に対して相互に進めていく必要があることを再確認しました。SOS をキャッチしたり、子どもをまずはありのままに受けとめたりすることが苦手な教員もいるので、その教員にどのように困っている子どもの気持ちを想像させたり、受容できるように変わっていったらもらえるか悩みながら日々取り組んでいるところです。

ふれあい教室



7月6日（土）に野生塾を開催しました。第1回目は「流しそうめんを食べよう」で56名の参加がありました。ふれあい教室の通室生の中には、はじめて参加した児童生徒もいましたが、野生塾のスタッフとして活動してもらいました。前日は会場づくりや名札の準備、当日は受付係、後片付け等、本当によくがんばってくれました。また、竹の箸や器作りの手伝いや協力している姿を見て頼もしさを感じました。



たくさんの地域の方や他の学校の子どもたちと交流することができ、みんなで食べた流しそうめんは、とてもおいしかったです。

第2回目野生塾「ナンを焼いてカレーを食べよう」は9月28日（土）に行います。今回の経験を活かして次回も頑張ってくれることを期待しています。



恩師の授業…

穴内小学校 長田 純彦

子どもの頃の学校生活を思い返すと、たくさんの楽しい思い出が浮かんでくる(もちろん、苦い思い出もたくさんある)。朝早くから登校し、友だちや先生と一緒にキックベースやドッジボールをしたり、砂場で相撲を取ったりして、みんなで元気いっぱい遊んだ。下校後も近所の子どもたちと田んぼに集まって、おにごっこやソフトボールをして、いつも日が暮れるまで遊び倒した楽しい思い出である。

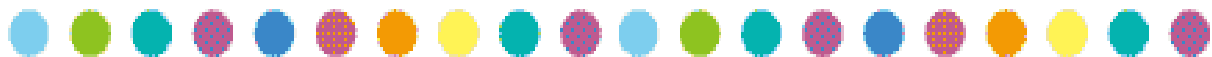
授業中も、先生が出してくる課題に好奇心をくすぐられたり、乗り越えたいと挑戦する気持ちを前面に出したりしながら、楽しく学習に取り組めた。先生がブラックボックスに入れた数字が(何かの式を通して)答えだけ出してみたり、大多数の意見に対して「本当にこれでいいんだね？」とおどけて揺さぶったりした。今考えると、先生は子どもの関心を引き出すことで、学級のみなを学習へと引き込んでいたのだと思う。一番しびれたのは、「みんなの力で、算数の歴史上の偉人が解き明かしたきまりを導き出したがで！」とほめられた時である。「やったー！」と教室中で歓声が巻き起こった記憶がある。

先生の授業を振り返ると、このような流れであったと記憶する。①授業の始めに子どもの興味を引き出す。②問いに対する見通しを子どもにもたせる(十分揺さぶりながら、根拠を述べさせながら)。③班や学級で考えを発表して話し合い、答えを導き出す。

このような流れでもたらされた結論は、子どもたちがみんなで協力して導き出したものと感じることができ、授業で達成感や喜びを得ることができた。先生は子どもに解き方や答えを安易に教えるのではなく、子どもたちに自力で考えさせ、答えを導かせることで、その時間に習得すべきものを教えていた。そのことにより、子どもに自分から学びに向かうということも教えていたのだと改めて気づかされた。

先生の授業スタイルは、現在小学校で取り組んでいる、「主体的・対話的で深い学び」に通じていると感じる。子どもが主体的に課題に取り組み、協働的に解決していく授業では、子どもが自ら考え、力を合わせて解決する達成感を感じることができ、また新たな課題に対しても意欲的に立ち向かっていくことができるのである。

本校でも、複式学級であるがゆえ、子どもが主体的に考え、仲間と協働して解決していくことで深い学びを実現することを目指している。そして、何より子どもに学ぶことの楽しさや仲間と協働して課題を解決していく喜びを感じてもらいたいと心から願う。



安芸市教育研究所

〒784-8501

安芸市土居82-1

TEL (0887) 32-0232

FAX (0887) 35-1051

E-mail : aki-l@city.aki.lg.jp

